
無口猫の恋

斎藤章

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無口猫の恋

【Nコード】

N2358M

【作者名】

斎藤章

【あらすじ】

巧×希の恋愛ストーリー

日常（前書き）

どうも、斎藤章です。どうぞ、読んで下さい。

日常

ピピピピッ……。

目覚まし時計の音が鳴り響く。

外はまだ暗く、殆どの人は布団の中で寝ている時間。

俺は目覚まし時計を止めて起き上がった。

今日も1日が始まるな…。

そんなことを考えつつ着替えを済ませて厨房に向かう。

巧が厨房に入ると既に希がケーキを作り始めていた。

「…巧、おはよう」

「おはよう、希」

巧は希にあいさつを返した。

「乙女姉さんは？」

巧は辺りを見回すがストレイキャッツのオーナー兼パティシエールの乙女が見当たらない。

「…まだ寝てる」

希は少し申し訳なさそうにこっちを見た。

ストレイキャッツは洋菓子店である。

だからこうして朝早くから売り物のケーキを作っているわけなのだが、オーナーの乙女姉さんがまだ寝ている。

俺は「はあ…」と溜め息をついて乙女姉さんを起こしに行った。

が…乙女姉さんは寝ボケて起きようとはしなかった。

結局希と俺の二人で作業をした。

これが一度や二度ではなくほぼ日常化しているのが悲しい。

最近ではほぼ希がストレイキャッツのメインパティシエールとしてケーキを作っている。

しかも希が作った方が姉さんのより美味しい…。

その後二人で今日の売り物となるケーキを作り終え、朝食を食べた。学校へ行く支度をしているとようやく乙女姉さんが起きてきた。

「おつはよー！巧、希ちゃん」

朝からハイテンションのあいさつをする。

もう今朝の寝坊のことを怒る気も失せるくらい。

「乙女姉さん、もう俺たちは学校に行くから店のことは頼んだよ」

「まっかせなさい」

そう言つて自信あり気に親指を立てる。

それでも乙女姉さんに限つては全然安心できないのだが時間がない。

「じゃあ行つてくるよ」

「にやあ。行つてきます」

「行つてらっしゃーい」

乙女姉さんに見送られ、学校へと向かった。

学校へと行く途中にある芹沢教会に寄った。

教会の前に着くとほぼ同時に文乃が出てきた。

「おはよう、文乃」

「なんでアンタがここにいるのよ！」

何故か怒り気味の文乃。

「どうせ学校への途中にあるんだからいいだろ？」

「勝手にすれば。別に私はアンタと学校に行きたい訳じゃないし」

それだけ言つて歩き始める。

この様子を見たらなんて仲の悪い幼なじみなんだろうって思うだろう。

でもそれは違う。

文乃は素直に自分の言いたいことが言えない性格なのだ。

つまりさっきのは『巧と学校に行きたい』って言っている。

普通の人にはわからないだろうけどこっちは長いつきあいだから文

乃の言つてることが本当かそうでないかはすぐにわかる。

「で、お店の方はどうなってるの？」

文乃は相変わらずムツとした感じで聞いてきた。

「今朝の仕込みは乙女姉さんが起きなかったから希と二人でやった。

ケーキは全部希が作ったけど」

「にやあ」

少し誇らしげな表情を希は見せた。

「また乙女さん抜きで仕込みをしたの！？まったく、乙女さんにはしっかりしてもらわないと」

文乃はストレイキャッツのバイトとして希が来る前から働いている。クリスマスやバレンタインなどの忙しい時期になると朝の仕込みまで手伝いに来てくれる。

俺やストレイキャッツのことを心配してくれる頼れる幼なじみなのだ。

学校に近づくにつれ生徒の数が増えてくる。

一人で登校する者、友達と話しながら登校するものなどいろいろだが、どこにでもある普通の登校風景だ。

「ういつす！巧」

後ろを振り返ると家康と大吾郎が歩いてきた。

「おう！おはよう、大吾郎」

「うむ」

「俺に対してはあいさつなしか！？」

家康の声が響き渡る。

「せっかくこの前話したアニメのDVD BOX持ってきてやったのに貸してやんねえからな」

そう言つて俺にDVD BOXを見せつける。

「すみませんでした家康さん。数々のご無礼をお許してください」

俺は深々と頭を下げた。

「始めからそうしていればよいのだよ」

ほれっと言いながら家康はDVD BOXを貸してくれた。

コイツは重度のオタクだ。

確かにコイツの影響で俺もちょっぴりオタク気味だがコイツ程ではない。

「おはようございます、巧先輩…ってああー！そのDVDはー！」
突然大声をあげたと思うと十和野は俺からDVDをひったくった。

「やっぱり。これは初回限定版（声優＆原作者へのインタビューの

特典映像付き)じゃないですか!」

目を輝かせながらDVDを見つめる。

「ふっ、気づいたか十和野…そうさ、それは俺が週末を全て潰して並んで手に入れた品なのだ」

私にも観せてください!と、家康にねだる十和野。

十和野はつい最近『迷い猫同好会』に入った新入生だ。

最初はいろいろあったが今では立派な俺達の仲間だ。

そうこうしているうちに俺達は学校へと着いた。

『梅ノ森学園』…これが俺達の通う学校の名前だ。

お金持ちの理事長が趣味的な感じで運営しているため授業料が一切いらない。俺や文乃にとってはありがたいことである。

立派な校門の前にはこれまた高級感バリバリの黒いリムジンが停まっていた。

「遅いわよあんた達!」

リムジンのドアが開き、中から千世が現れた。

千世は理事長の孫娘で超がつくほどのお金持ちだ。

『迷い猫同好会』の会長を務めている。

「うっさいわね。教室で待ってればいいじゃない」

「なっ、この私に口答えする気!」

「にゃあ、仲良く」

いがみ合う文乃と千世、それを止める希…いつもと変わらない様子だ。

「巧先輩、これ観終わったら私に貸してください!」

家康とオタクトークに華を咲かせてた十和野が俺の体を押した。

突然だったため俺は持ち直すことが出来ず転けてしまった。

「なっ!」

転けた場所がたまたま文乃の近くだったためもろにパンツが見えてしまった。

(ちなみに縞パン)

文乃からは沸々と怒りのオーラが込み上げてくる。

「ちょ、ちょっと待て文乃。今は不可抗力であって…」
必死に弁明しようとする。が…

「二回死ねー！」

お決まりのセリフを言いながら文乃は俺を蹴り飛ばす。
これも俺達の日常ではいつものこと……。

日常（後書き）

どうでしたか？また、読んで下さい。

伝えたい想い（前書き）

どうも、斎藤章です。読んで下さい。

伝えたい思い

昼休み

文乃・千世・希の三名は学校の屋上にある『迷い猫同好会』の部屋に集まっていた。

「何で今回集まってもらったかあんた達わかってるでしょうね？」

いつになく真剣な表情で千世は言った。

「巧のことでしょ？」

「そうよ！」

文乃に向けて『その通り』と言うように指を指す。

「しかも…事態はかなり深刻よ」

千世の言葉に他の二人も頷いた。

先日のティーパーティーの件で十和野が『迷い猫同好会』の仲間になったことは良かった。

元々そのために企画した訳だから千世・文乃・希も大成功だと思っている。

が…しかし、その後巧と十和野の仲が急に良くなったことに問題があるのだ。

お互い趣味も合うため、いつも会話が盛り上がる。

いつ十和野が巧のことを好きになってもおかしくぐらいだ。

これは三人にとっては非常にマズいことである。

十和野が巧のことを好きになるということはライバルが増えるということになるからだ。

「とにかく！これ以上ライバルが増えないようにしなければならぬ訳よ」

バンと机を叩いて立ち上がる千世。

「確かにそうだけど…いったいどうするの？」

「それがわからないから集まってるんじゃない。何か良い案はないの？」

その後、しばし沈黙が訪れる。

「誰一人ないの？」

「……にゃあ、ない」

「私も……」

三人は一斉にため息をついた。

「役に立たないわねえアンタ達」

「べ、別に私は巧のことなんか好きでもなんでもないから関係ないし」

「文乃、嘘」

「うっ……」

希の言葉に千世も頷く。

希と千世もこの一年間で文乃の言ってることが本当かそうでないかわかるようになった。

「もつと素直になりなさいよねえ」

「あ、あんたに言われたくないわよ」

「にゃにお」

朝と同じようにケンカを始める二人。

「ケンカしても何も変わらない」

二人の間に入って仲裁をする。

二人も希の言う通りだと思ったのか今回は素直にケンカを止めた。

「とにかく！モタモタしてたらいつまたライバルが増えるかわからないからガンガンアタックするわよ。以上！」

「ちよつと待つて。それ、この前も似たようなこと言っただけだった？」

「……にゃあ。一緒」

結局前回とほとんど変わらない内容でこの場を終えることになった。午後の授業も終え、放課後となった。

普段なら文乃と千世もバイトとして『ストレイキャッツ』の仕事があるのだが、今日は二人共用事があるとかで俺と希だけということとなった。

まあ乙女姉さんもいるから大丈夫だろう…そんなことを思っ
て帰宅するとやけに店が静かである。

まさかと思いい店内を探すと置き手紙を見つけた。

「しまった…」

俺はその場にしゃがみ込んだ。

乙女姉さんの残した手紙には『チリで大規模な森林伐採が行
われているので木を植えてきます。チリも積もれば山となる』
乙女』と書かれていた。

またいつものあれかと思うと気が遠くなった。

そんな巧の気持ちを察してか希は巧の頭を撫でる。

「乙女姉さんが帰ってくるまで頑張ろうな」

「……にやあ」

希はコクンと頷いた。

その日の夜、希はリビングのソファに座って猫たちに囲まれ
ながらテレビを見ていた。

これは希の毎日の日課みたいなものだ。

寄り添ってくる猫たちを撫でてやることで心が落ち着く。

が、今日はずっと考え事をしていた。

乙女の不在で一つ屋根の下で二人つきり…今まで何度も望
んだシチュエーションだ。

普段は文乃や千世がいるためいつも途中で邪魔が入っていた。

しかし二人つきりとなれば邪魔者は誰もいない。つまりチャ
ンスである。

でもいざ二人つきりになると何もできないのである。

その原因は文乃と千世の存在だった。

鈍い巧に自分の気持ちをわかってもらうには告白しかない。

だがもし自分と巧が付き合い始めたら文乃と千世はどうする
のだろうか。

文乃と千世はライバルであると同時に大切な仲間でもある。
文乃と千世とも仲良しのままでいたいという気持ちもある。

それでいつも行動に移せないでいた。

「はあ……」

希は深いため息をついた。

）

すると突然携帯の着信音が鳴った。

ディスプレイには『村雨さん』と表示されている。

彼女は希が前にいた施設の施設長である。

前に施設を逃げ出した希を連れ戻そうとしたこともあったが、今では希が『ストレイキャッツ』で暮らすことを認めてくれている。

「……もしもし」

希は携帯を手に取り電話に出た。『もしもし、希？進学おめでとう！』

どうやら進学祝いの電話をかけてきたみたいだ。

「……にゃあ、ありがとう」

『そつちでの暮らしは変わりはない？』

「ない。毎日楽しくやってる」

『そつ……なら良かったわ』

声で村雨が安心してゐるのが希にもわかった。

『何か話したいことある？』

「……ある」

希はさっきまで悩んでいたことを相談することにした。

「猫が三匹ゐるの」

『猫？』

「そつ。それで餌が一皿だけある」

受話器から希の相槌の声が聞こえる。

「みんな餌を食べたい。でも食べられるのは一匹だけ……私はどうすればいい？」

いつかに巧にした質問と同じものを村雨にもした。

『そつね……あなたはどうしてもそれが食べたいのよね？』

「……にゃあ、食べたい」

『だったらあなたはそれが食べれるように最善の努力をなさい。
あなたが諦める必要はないわ』

「じゃあ、わかった」

村雨の言葉に希も決心がついた。

『それにしてもあの巧って男がそんなに良いの？』

予想もつかない村雨の発言に希は驚いた。

「た、巧のことじゃない」

いつも冷静な希が珍しく取り乱しているのが村雨にはわかった。

『気づいてないと思った？それに私にまで隠し事する気？』

「……じゃあ、ごめんなさい」

『別に怒ってないわよ。それで、そんなに巧って男が好きなの？』

「……じゃあ、好き！」

『そう…なら私は何も言わないわ』

村雨は改めて希が施設を出て巧たちと出会ったことは希にとってプラスになったと感じた。

『頑張りなさいよ。あなたならできるわ』

「わかった。ありがとう」

また連絡するわと言って村雨は電話を切った。

「希いゝ。風呂沸いたから先に入れよ」

電話を切ったとほぼ同時ぐらいに巧がリビングに入ってきた。

「巧、話がある」

希はそう言って話を切り出した。

「何？」

希は一度目を閉じ深呼吸をした。

村雨のおかげで自信がついた。

今日、はつきりと巧に自分の気持ちを伝えよう。

そう心に決めて目を開けた。「私は巧が好き」

簡潔にはつきりと巧に自分の気持ちを伝え希は顔を赤くした。

「えっ！！」

まさかそんな話だと思ってなかった巧は慌てている。

「私のこと、『家族』って言うてくれていつも優しい巧が好き」
「希…」

普段無口で無表情の希が珍しくたくさん話した。
だからこそ希がどれだけ本気なのか巧にはわかった。

「…俺なんかでいいのかな？」

「にやあ、いい」

自信なさげに聞いてくる巧に希は頷いた。

「そう…じゃあこれからよろしく」

巧は照れくさそうに言った。

「……にやあ、よろしく」

希の表情がパーと明るくなった。

その日の希は巧に自分の気持ち伝わったことへの充実感でいっぱいだった。

次の日

昨日とほぼ変わらない朝を過ごした。

変わってることと言えば乙女姉さんがいないことと希がずっと嬉しそうにしていることぐらいだ。

まあ俺としても彼女いない歴〃年齢の歴史にピリオドが打てたことは正直嬉しかった。

その日、俺と希はストレイキャッツの良心市システムを発動させて学校へ行った。

昼休み

文乃と千世は並んで歩いていた。

「なんでついて来るのよ!？」

「それはこっちのセリフよ。あんたこそついてこないでよ」

何故かいつも顔を合わせるとケンカに発展する二人。

でもお互い本当に嫌っているわけでもない。

『ケンカするほど仲が良い』と言ったところだ。

「私は希に呼ばれて部室に行くだけだから」

「私も希に『話がある』って言われただけだから」

「……ねえ、希から私達に話があるって珍しくない？」

「そうよね……いったい何の話だろ……」

思い当たる節もなく二人は部室へと向かった。

文乃と千世が部室に入ると既に中に希がいた。

「希、私達に話って何？」

「……大事な話」

「大事な話って巧のこと？」

「……そう」

希は首を縦に動かした。

「昨日、巧に告白した」

「ふゝん……告白ね……って告白！ちょっと、希、それ本当？」

「……にゃあ、本当」

「そ、そ、それで巧はなんて？」

「OKしてくれた」

希が巧に告白して、巧がそれをOKした……二人にとっては衝撃的な話だった。

昨日までしていた恋に突然終わりがきてしまった。

その後数分間、二人は無言のまま立ち尽くした。「……ごめんなさい」沈黙を破ったのは希だった。

「何で希が謝るのよ」

「私が巧に告白したせいだから……」

「抜け駆け上等って前から言ってたでしょ。私達がのんびりしてたのがいけないんであって希が謝る必要はないって」

「そうそう。それに私は巧のことは好きでもなんでもないから気にしてないし……」

二人共、口ではこう言っているがやはり表情が暗い。

文乃に至っては自分の気持ちと正反対のことを言っている。

無理をしているのが希にはすぐにわかった。

「この勝負、希の勝ちね。おめでとう」

「ちよっと、あんた。そんなに簡単に諦めるわけ!？」

「今さら何ができるの？私達も今から告白する？したって無理でしょ。もう私達にできるのは希を応援してあげるくらいしかないですよ！」

千世は涙を流しながら訴えかけた。

千世だって文乃の言うように簡単に諦められるわけがない。

しかし、こうなってしまった以上なかった。

「…そうね…確かにあんたの言う通りだわ」

そう言う文乃は希の方を向いた。

「私達の想いは巧には伝えられなかった。でも希は違う。だから私達は希を応援するわ」

「そうよ。何かあったらいつでも相談しなさいよ」

千世も文乃も穏やかな表情を見せてくれた。

「ありがとう。二人共」

文乃と千世の巧への想いは希もよく知っている。

だからこそ二人がどれだけ辛いかわかる。

でも二人はそんな状態でも自分を応援してくれると言ってくれた。

希はこの二人の分も頑張ろうと心に誓った。

その日の放課後

「迷い猫同好会」のメンバーはストレイキャッツに集まっていた。

これによりようやく良心市システムが解除される。

「本当に誰もいないのに店を開けてたんですね…」

まだストレイキャッツで働き始めて日の浅い十和野にとっては驚きの光景である。

「乙女姉さんがいない時は毎日これなんだよ…希がくる前なんかケーキすら並んでなかったんだ」

正直、常識的に有り得ないことが一般化している自分達が恐ろしい。乙女姉さんの日頃の行いが良いのかそれともただの偶然か、まだ一度も泥棒に入られてないことと一応お客さんがちゃんと代金を払ってくれていることは不幸中の幸いだった。「乙女さんにはもっとオーナーとしての自覚を持ってもらいたいものよね」

まったくである。でも本人にキツク言ってもすぐいなくなってしまうので今では全員が諦めていた。

「巧、お砂糖切れてる」

厨房で作業をしていた希が顔を出した。

「マジで？まだあったと思ってたんだけどな…買ってこないと」

「私は今月の売り上げの計算があるからパス」

「私はお客さんが来た時のために残ってないといけないし、十和野さんにもいろいろ店のことを教えなきゃいけないから…巧と希で行ってきたら？」

「えっ、俺と希で！？べ、別に二人で行かなくてもいいんじゃないかな？」

昨日のことで下手に意識してしまい慌てる巧。

「いいから行ってくる！！」

何故か俺と希の二人で行くことにこだわる文乃と千世、結局俺は二人に追い出される感じで希と買い出しに出掛けた。

「よし。これだけあれば当分砂糖の在庫切れの心配はしなくていいだろ」

業務用スーパーでストックを含めて多めに買い、店を出る。

「じゃあ店に帰るか」

「にゃあ」

二人は店に向かって歩き出す。

「あっ…」

急に何かを思い出したかのように希は立ち止まった。

「どうした？他に何か買わないといけないものでもあった？」

「…ない」

希はそう応えてサッと俺の前に手を出した。

ちょうどその時仲の良さそうなカップルが手を繋いで俺達の横を通り過ぎていった。

「もしかしてアレをやれと？」

「にゃあ。大吾郎もやってた」

今年のバレンタイン、大吾郎と『迷い猫同好会』のOGである珠緒先輩が付き合い始めたその日、放課後に手を繋いで二人仲良く下校したことは今も有名な話である。

それから二人は異常なくらいのラブラブっぷりだ。

「どうしてもやらないとだめかな？」

「……にああ。だめ」

じいーと俺の目を上目遣いに見つめる希。

（そんなに俺を見ないでくれ。）

巧は、内心そう思っていた。

「…わかったよ」

遂に観念して希の手を握った。

希は満足げに歩き出す。

周りの視線が気になる…。

俺は恥ずかしい気持ちを抑え、店へと帰った。

伝えたい想い（後書き）

どうでしたか？感想を頂けると幸いです。

臨海学校（前書き）

どうも、斎藤章です。今回もどうぞ読んで下さい。

臨海学校

それから約2ヶ月が経った。

鬱陶しい梅雨が明け、初夏の季節になる。

ちなみにまだ乙女姉さんは帰ってきてない。

今ごろチリで毎日植林をしているのだろう。

乙女姉さん…そろそろ帰ってきてくれ…これが今の俺の願いだ。

こっちの方は相変わらずだ。

今日も『迷い猫同好会』のメンバーはストレイキャッツに集まり作業をしている。

「ねえ…こうなんかグツとテンションの上がるイベントとかないの？」

お客用のテーブルに座っていた叶絵が言った。

叶絵は文乃の親友で俺達のクラス委員長だ。

『迷い猫同好会』に入ったのはほとんど十和野達と変わらない時期で今では同好会のムードメーカーだ。

「どうしたんだよ急に？」

「だってさ…、こう毎日毎日ケーキを売るばかり…いい加減飽きてくるんだよね…私的にも読者のにも」

読者って誰だよとツツコミたくなつたがあえてツツコまなかった。

「だからさ…ここらでこう楽しめるイベントが欲しいわけよ」

本当個人的な希望である。

「あるわよ」

作業をしていた千世が話に入ってきた。

「えっ！あるの？何、何教えてちーぽん」

「俺も知りたい。千世、何があるんだ？」

正直この時期にそんなイベントは身に覚えがない。

「臨海学校」

「臨海学校？そんなの去年はなかっただろ」

「そりやそうよ。今年からなんだから」

これまた何で…

「で…何で急に今年から臨海学校なんてあるのよ？」

話を聞きつけ他のみんなも集まってきた。

「その無駄にテンションの高いのが言ったように私も同じことを感じてたのよね。そこでお爺様に相談したらこの臨海学校が新たに梅ノ森学園の行事に加わったわけよ」

……… なんていうか… 流石梅ノ森家と言った感じた。

たったそれだけの理由で新たな学校行事を作るとは……… 恐るべし梅ノ森財閥。

みんなは呆れ顔をしている。ただ一人を除いて…

「いやっほー！さっすがちーばん、わかってるねえ。で、いつなの？どこでやんの？」

ハイテンションモードに突入した叶絵が質問の嵐を浴びせる。

「日時は来週。場所は梅ノ森家が所有するプライベートビーチと超高級ホテル。費用は全て梅ノ森家が負担するわ！」

千世は誇らしげに言い放った。そんなこんなで決まった臨海学校当日。

移動中のバスの中で各々みな友達との雑談を楽しんでいた。

一年生の十和野と服部以外はみな同じクラスの『迷い猫同好会』メンバー。

そのためみんなでかたまつて座っていた。

「ついにきたよ臨海学校！この日をどれだけ待ち焦がれてきたか…」
そう言つて泣くマネをする。

まだホテルにも着いてないのに既にテンションの高い叶絵。

「委員長：その元気ホテルに着くまでとっておけよ。なんて言うか、こっちがついていけない」

他のみんなもうんうんと頷く。

正直鳴子のテンションはみんな鬱陶しいと感じているようだ。

「どうしたどうした巧っち？これから行く所は海ですぜ海！」

「そりゃ臨海学校だからな」

海のない臨海学校なんて聞いたこともない。

「海と言えば海水浴。海水浴と言えば…そう、水着！」

最後のところ溜めて言うようなことか？というツツコミはあえてしないであげた。

「巧っちの愛しの希っちの水着姿をじっくり堪能出来ませ」

そう言うってこちらに向かつて親指をたててきた。

「で、実際のところどうなのよ巧っち？希っちの水着姿楽しみなのかい？」

「べ、べつにどっちだっていいだろ」

俺は鳴子からの質問の答えを放棄した。

そりゃ俺だって健全な男子高校生だ…どちらかと言えば楽しみの方だ。

でもここには希もいるんだ。

こんなこと口が裂けても言えるわけがない。

チラリと希の方を見た。

すると希と目が合った。

変に意識して顔が赤くなっているのが自分でもわかった。

「…巧、楽しみ？」

「えっ、な、何が！？」

「臨海学校」

『水着』って言われたらどうしようかと一瞬焦った。

「もちろん楽しみだよ。希は？」

「私も巧と一緒に」

「そう…じゃあいい思い出になるといいな」

「……にああ」

希は頷きつつすら微笑みを見せた。

こうして俺達の二泊三日の臨海学校が始まった。

臨海学校二日目

一日目はほとんど移動だけで終わってしまった。

俺達がホテルに着いた時にはもう辺りは真っ暗だった。

つまり実質今日からが臨海学校と言ってもいい。

朝食後は昼まで自由に楽しめということ、『迷い猫同好会』の男どもは文乃達の準備ができるのを待っていた。

「それにしてもほんとすごいホテルですね」

まったくだ。めちゃくちゃ広くて超豪華。

さすがに一人一部屋とはいかず三・四人で一部屋だけどそれでも十分過ぎる広さだ。

金持ちはすごい…改めて思い知らされた。

「男子ども～お待たせ～」

しばらく雑談していると叶絵を先頭に文乃・千世・希・十和野がやってきた。

「えらい時間が掛かったな」

「まあまあ。女の子はいろいろ準備が大変なわけですよ。それよりもみんなの水着姿はどうですか？」

委員長はスポーツ用の水着…活発な委員長らしいと言えばそうだろう。

千世・文乃・希はそれぞれ去年の水着コンテストで着た水着。

千世は希と文乃のプロポーションを羨ましそうに見て、文乃は無愛想な表情、希は相変わらず無表情だ。

十和野は恥ずかしそうに他の四人に隠れる形にいる。

「フツ、三次元の女の子の水着姿なんて俺には興味な……」

「黙れ菊池！アンタに聞いてない」

キツイ野次に一歩後退する家康。

「…巧、どう？」

入れ替わりに希が前に出る。

「うん、すごい似合ってるよ」

そのひとことで希の表情がパアッと明るくなった。

一方、文乃・千世の二人は寂しそうな表情でそれを見ていた。

もし自分が希の立場だったらどんな良いだろうか…二人共まだ完全

にふりきれない様子だった。

「まあ時間も限られていることですし、今日は思う存分楽しもう！」
そんな二人の気持ちを察してか叶絵が話を切り出す。

「うむ。珠緒さんがいないのが心残りだが珠緒さんの分まで頑張つて楽しまなければ」

楽しむのに頑張るもなにもな…いや、もう何を言っても無駄か…。

大吾郎はすでに海に向かってダッシュしていく。

とにかく、大吾郎が先陣を切り、俺達は海で遊び始めた。あつという間に時間が過ぎ昼食の時間になる。

昼食はビーチでバーベキュー…みんなワイワイ雑談しながら食べている。

「あつ、菊池！それ私が焼いてた肉よ！」

文乃が大声をあげる。どうやら家康が文乃の肉を食べたようだ。

「フツ、この世界は弱肉強食！それにそんなに肉に執着心を持つて…そんなんじゃあ太っちゃいますよ」

「う、うっさい。二回死ねー！！」

文乃の蹴りが炸裂し家康は遙か後方に吹き飛ぶ。

弱者（家康）が強者（文乃）に喰われたな…家康、今のはお前が悪い。

まあここが砂浜で良かったな。

俺は家康を哀れみの眼差しで見た。

砂浜に頭から突っ込みのびている家康を横目に俺は肉を取ろうとすると…

「巧…」

声をかけられたと思うと希が自分の肉を俺の口元まで持ってくる。これはもしかして…。

「…あーん」

やっぱりかい！

「ちゃんとフーフーしたから大丈夫…」

いや『大丈夫』じゃないって。

みんなもいるから…ホラ、委員長なんかめちゃくちや目を輝かせてこっち見てるし…。

「……」

希は無言でさらに肉を近づける。

そして数十秒が経過した。

仕方がない……どうしても俺が食べないと気がすまないみたいだし……。

俺はとうとうあきらめて希の肉を食べた。

肉が口に入った瞬間、周りからオオツと歓声が上がる。

「いやゝ見せつけてくれますなゝお二人さん。夫婦みたいですね」
やめてくれ。

こっちは恥ずかしいんだから。

「巧、最初は恥ずかしいだろうがその内それも気にならなくなるから安心しろ」

俺に対してのアドバイスのつもりなんだろうが…大吾郎。

お前と珠緒さんの場合あれは異常だから。

普通あんな人前でやらないよ…。

そう思いながら俺は肉を飲み込んだ。

「…美味しい？」

「うん、美味かったよ」

「よかった。じゃあ次…」

そう言つてまた肉を近づける。

えっ…まだやんの……。

その後俺は腹いっぱいになるまで希に肉を食わされ続けた。食事を終え少し休憩をとる。

さすがにみんな食後にすぐ遊ぶなんてできないようだ。

「それじゃあこの時間を使って作戦会議を開くわよ」

千世は立ち上がってメイドの鈴木と佐藤にホワイトボードを用意させる。

「ちよつと待つて。なんんのための作戦会議よ？」

「えっ、そんなのビーチバレー大会のために決まってるじゃない」
当たり前のように答える千世に『ビーチバレー大会！？』と千世以外のメンバーがユニゾンしてツッコむ。

「言っでなかったっけ？ほら、ただ遊ぶだけじゃあ面白くないですよ。だからお爺様が企画したの。ちなみに優勝賞品は米俵一俵よ！」
初耳だよそんな話。

ていうか高校生のイベントで優勝賞品が米俵って……。

「一チーム二人一組で参加は自由」というわけで私がチームを考えてきたから発表するわよ」

そう言っで千世は何の資料かわからないがグラフや表の書かれた紙を取り出した。

「まずは一組目：大吾郎＆柴田チーム」

おっ…結構良いチームじゃね？

「先輩、頑張りましょう」

「うむ…やるからには天下を獲るぞ」

一人だけかなり燃えてるな…。

「次に二組目：芹沢＆鳴子チーム」

「よっしゃー！頑張るぜ」

「まあ私は別に優勝賞品なんかに興味はないけど負けるのは嫌だし…本気でいくわ」

文乃も委員長も運動神経は良い方だしチームワークも良い…この二人なら上位を狙えるだろう。

「そして三組目：巧＆希チーム」

「巧…頑張ろう」

「ああ、そつだな」

希の何をやらせても一級品の仕事をする天才さは誰もが知っている。自分の方が足を引っ張るのではないか…そつちの方が心配だ。

「で…十和野なんだけど…」

先程までとは変わって言いにくそうにしている。

「梅ノ森先輩…実は私クラスの友達とでる約束をしたんですが…」

こちらも言いにくそうに言った。「あ、そう？ならちよとよかつたわ。十和野だけペアがないからどうしようかと思ってたところなのよ」

どうやらさつき言いにくそうだったのはそういうわけだったみたいだ。

「待つて…あんたは出ないの？」

「私は今回は裏側にまわるわ」

「何で言い出しっぺのあんたが出ないのよ！？」

「仕方ないでしょ！ビーチバレーなんてやったことがないから私とペアを組んだ人に迷惑をかけることぐらい目に見えてるじゃない！」
悔しそうに言い切る千世。

テニスやスキーなど幼い頃から英才教育を受けてきたスポーツなら千世はかなりの実力を持っている。

でもやったことがないスポーツとなると話は別だ…そうなると逆に素人よりも下手かもしれない。

千世はそれを理解した上でこのチームを組んだんだろう。

「確かにあんたの言う通りだわ…今回は、その……ごめん」
珍しく自分から千世に謝る文乃。

「う、うるさい！同情なんかしないでいいわよ」

千世にとつての精一杯の強がり…でも気にしているのが千世の態度でわかる。

「とにかくあんた達は『迷い猫同好会』の肩書きを背負って出場するんだからね。会長としての私のメンツにかけても絶対に優勝しなさいよ！」

なんだか重いのか重くないのかよくわからないものを背負わされて試合に挑むことになった。

「さあ、やって参りました！『第1回梅ノ森学園ビーチバレー大会』
実況は私、菊池家康」

「解説はこの梅ノ森千世がやるわよ」

特設ステージの上で二人が座ってしゃべりだす。

マイクはもちろんVTR用の小型モニターも準備されておりかなり本格的だ。

「何やってんの？」

素朴な疑問を投げかける。

「試合には出られないから私はこっちで目立つことにしたのよ！」

千世は胸を張って答えた。

なるほど…正当な理由だな。

「で、家康、お前は？」

「俺が気絶している間にどんどん話が進んじまってるしチームを組もうにも誰も俺と組んでくれない…だからこの仕事を引き受けたんだよ！」

そっぴやコートを作るのに邪魔だからって叩き起こされたんだっけ。そっぴやなけりや今もまだ埋まってるただらうな…。

家康の正当（？）な理由にも俺は納得した。

「というわけで早速一回戦を始めちゃいましょう！」

家康の司会進行でビーチバレー大会はスタートした。ビーチバレー大会に参加したのは全部で16チーム。

流石に優勝賞品が米俵一俵じゃあ参加数は稼げなかったみたいだ。俺と希のチームはAグループ、他の『迷い猫同好会』メンバーのチームは全てBグループ…つまり決勝まで俺達は文乃達と戦うことはない。

そっぴやうわけで俺達は早々に決勝まで駒を進めた。

相手にバレー部のエースがいっぴやうが、身長2メートル越えの長身男がいっぴやうが希がいれば関係ない。

正確で強烈なスパイクをバンバン決めるし俺がミスをしててもカバーしてくれる…はっぴきり言っぴて俺なんかいなくてもいいぐらいいだっぴた。

「巧先輩、霧谷先輩、決勝進出なんてすごいですね！」

Bグループの試合が終わるまで休憩していると十和野がやってきた。「まあ、ほとんど希のおかげだけ…ところで十和野はどうだっぴた

？」

「私は一回戦負けです。惜しかったんですけどね」

十和野は悔しそうな表情を俺と希に見せた。

「文乃と大吾郎達は？」

「今、準決勝で戦ってますよ。勝った方が先輩達の決勝の相手です」
「やっぱりあの二チームが勝ち上がったか…どっちが勝つんだろう」
するとBグループの試合が行われていたコートの方から歓声があがる。

どうやら決着が着いたようだ。

「希、行ってみようぜ」

「にやあ」

俺達は試合結果を知りにコートへ向かった。

コートの周りにいる生徒達をかき分けながら進んで行くと文乃と鳴子の姿が見えた。

「おーい！文乃、どうだった？」

俺の声に気づいた文乃が首を横に振る。

どうやら負けたみたいだ。

となると決勝の相手は大吾郎と柴田か…

俺はコートの反対側を見る。

そこで俺は目を疑った。

「何あれ…」

俺の視線の先にいるのは確かに大吾郎と柴田…しかし二人が身につけているものは水着ではなく赤いフンドシ。

筋肉男とイケメンの赤フン姿のツーショット…かなりシユールな絵づらだ。

「流石の私もあれにはひいたよ…」

あの委員長でさえ二人を冷たい眼差しで見ている。

すると赤フンコンビがこちらに向かってきた「どうしたんだよその格好…」

「気合いを入れようと思ってな。見ろ！この情熱の赤を」

いや、『見る』と言われなくても否が応でもその色は目に入ります

よ…。

大方柴田は無理やり大吾郎に付き合わされたのだろう…可哀想に。

「それよりも巧、賞品の米は必ず俺が貰って行くぞ！」

ビシッという音が聞こえてきそうな勢いで俺に指を向ける。

「ど、どうしたんだよ急に？」

たかが米に何故コイツがこんなにも熱くなるのか理解できない。

「この米はプレゼントにするのだ！」

どうやら珠緒さんのためらしい。

大吾郎からのプレゼントなら米だろうとなんだらうとあの人は大喜びするだろう。

「こっちも賞品は譲らない」

グイッと希が前に出る。

あれ…希も？

「3日も店を閉めて今月ピンチ。だからこれで食費稼ぐ。こっちは生活がかかってる、絶対負けない」

…ごめんな。

そんな心配までさせて…

試合開始前から俺はかなりブルーな気持ちになった。
ピー

試合開始のホイッスルが鳴り、決勝戦が始まる。

まずは希がサーブを打つ。

希が打ったサーブを柴田が上手にレシーブして大吾郎がスパイクを打つ。

ボールは俺の真正面に。

が…ボールの勢いが強すぎて弾くので精一杯だった。

ひよろひよろと上がるボールを見て『ミスった』という考えが頭に浮かんだ時、希がそれを無理やり相手のコートにねじ込みポイントを奪った。

「サンキュー希。助かったよ」

「じゃあ。巧、次がくる…」

希の視線の先には「うおおー」とマンガみたいに叫んでいる大吾郎がいた。「流石だな、霧谷、巧…ようやく俺が本気を出してもよいと思える相手に巡り会えたぞ」

どうやらさっきのはまだ手を抜いてたらしい。

冗談じゃない。

さっきのだって十分きつかったのにさらに強いスパイクがきたら…。何の対策もないまま次のプレーが始まる。

さっきと同じように希がサーブを打ち柴田がレシーブし、大吾郎にボールが回る。

「はっ！」と言いながら大吾郎は強烈なスパイクを放った。

そしてボールは誰も触らないまま地面に落ちた。

「どうだ俺のスパイクは！」

自慢げに言う大吾郎。

「確かに凄いスパイクだな…入っていればの話だけど」

「何!？」

大吾郎がスパイクしたボールはコートの中のラインより大きく外れていた。

いくら凄いスパイクでもコートの中に入らなくては意味がない。

「くっ…次だ！次は決めるぞ！」

その後の結果はグダグダだった。

アツくなり過ぎた大吾郎は力任せのプレーで自滅…俺達の圧勝だった。

「てなわけで優勝したのは巧&希チーム!!この二人には梅ノ森家の独自ブランドの米俵一俵が贈られるわよ」

簡単な表彰式が行われる。

「ホントあんた達が優勝してくれて助かったわ」

賞状と賞品を受け取る際に千世が言った。

「会長のメンツとやらが保てたからか？」

「うーん…それもあるけどあの変態コンビの優勝を防いだのが一番かな。あんなの絵的にかなりマズいし」

まっ、確かにな…。

その変態コンビの一人、大吾郎は隅っこの方で落ち込んでいる。よっぽど悔しかったのだろう。

何わともあれ無事にビーチバレー大会を終えることができ安心した巧であった。臨海学校3日目…と言って1日目と同じで移動で潰れるからあとは帰るだけというわけだ。

時刻は朝5時。

大吾郎や家康はまだ寝ている。

が…ただ一人巧は起きていた。

毎朝仕込みのために早起きしているためもう体がリズムを覚えてしまってるようだ。

昨日はすぐ二度寝に入ったが今日は完全に目が覚めてしまっている。(何か飲んでくるか…)

そう思い起き上がる。

そして他の二人を起こさぬようそおくと部屋を出て行った。

自販機のある広間まで行くと既に誰かがいた。

「あれ、希？」

そこにいたのは希だった。

俺の声に希も気づく。

「巧、おはよう」

「もしかして希も目が覚めちまったのか？」

「にゃあ。巧も？」

「ああ。もう体に染みついてるみたい…」

笑いながら俺は自販機でコーラを買ってソファに座る。

「毎日毎日希に迷惑かけてばかりでごめんな」

「家族は迷惑をかけ合うもの…巧がそう私に教えてくれた」

「そっぴやそっぴだな」

そんなこともあったなあと思いながらコーラを一口飲んだ。

「なあ、前から聞きたかったんだけど…希は何で俺のこと好きになったの？」

俺の質問に希は「どうしてそんなことを聞くの？」と言うように首を傾げる。

「希は可愛いし料理も勉強も何でもできる…正直俺なんかよりもっとかつこいい人と付き合えるはずだろ？なのに何で俺を選んでくれたのかなって思ってたさ」

「私は巧の優しい所が好き。私のこと『家族』って言ってくれて暖かく迎え入れてくれたり、誰にでも優しい…そんな巧だから私は好きになった」

希は即答だった。

確かに巧の言う通りかつこいい人ならいくらでもいるだろう。

でもそんな人よりも巧の方が良い…それが希の素直な気持ちだった。「自分ではそこまで自覚はないんだけどな…でも希にそんな風に想われているのは嬉しいよ」

希と自分がつりあっているか自信がなかった巧には希の言葉はありがたかった。

「また明日から普段通りの毎日だな」

「にやあ。ケーキいっぱい作る」

「そうだな…俺もできる限りサポートするから、よろしく頼むよ」

「…にやあ」

『任せろ』と言わんばかりに希は強く頷いた。

その後も俺と希は何気ない雑談に華を咲かせた。

臨海学校（後書き）

どうでしたか？言いたいコトは、感想として受付中です。

夏休み（前書き）

どうも、お久しぶりです。斎藤章です。よろしく読んで下さい。

夏休み

臨海学校も無事に終え7月も終わりに近づく頃、学校は既に夏休みに入っていた。

学校が休みだから店を誰もいないのに開けておくなんてことをしなくともすむから助かる。

「今年の夏休みは落ち着いてるな」

「そりやそうでしょ。去年はどっかの誰かさんがあんな無茶なことをしたから余計に忙しかっただけだし……」

文乃は千世を横目で見ながら言う。

「しょうがないでしょ！ だいたいあんた達が私を無視するからいけないんじゃない。でもまあ……今では反省してるわよ……」

確かに去年の夏はまだ今みたいにお客さんが毎日来るなんて状況じゃなかった。

そこに千世が近くにライバル店なんかオープンするから全く客が来なくなつてマジで店が潰れかけたなんてこともあった。

噂では客が来なかったのは他に理由があつたらしいが、あの時は本当に大変だった。

でもこんなことがあつたから千世と俺達は仲間になれたと思つていい。

店の扉が開く。

「どうやら客が来たようだ。」

「やあ、巧くん。乙女さんはいるかな？」

そう言つて来店してきたのは商店街青年団長の現団長さんだった。

「いつものアレで今もまだ帰ってきてないんですよ」

乙女姉さんのことは鈴音町では知らない者はいない。

だから『アレ』と言えはすぐに皆理解してくれる。

「そうか。それは困つたなあ……実はコレのことなんだけどね」

そう言つて一枚のチラシを手渡す。

そこには『夏祭り』と大きく書いてあった。

「またこの時期になったんだけどまだ何をするか決まっていなくてね……何か良い案はないかなって思ってたね」鈴音町商店街の夏祭りは年々人が集まらなくなってきた。

毎年もつと人を呼び込もうといういろいと企画するのだが、これといつて成果は出ていない。

去年は『水着コンテスト』を行い文乃、希、千世も参加した。

「……特にないですね」

そんなこと急に言われても無理な話である。

「そうか……まあ考えていてくれないか。また一週間後にくるから」そう言つて団長は安いクッキーを一つ買って帰っていった。

「何か良い案でもあるか？」

団長さんが帰り客もない店内で巧は文乃、千世、希、十和野に聞いてみた。

「そうね……中国の雑技団でも呼んだらどう？この私が大御所の雑技団を手配してもいいし……」

「却下！」

千世の案をものの数秒で却下する文乃。

「あんでよ！？」

「こういうのはただお金をかければ良いって問題じゃないのよ」

「じゃあアンタは何か良い案でもあるわけ？」

「そ、それはないけど……」

「まあまあ。団長さんも言ったけどあと一週間もあるんだから気長に考えればいいさ」

とりあえずケン力を始める寸前の二人をなだめる巧。

「希は何か案ある？」

「……水着コンテスト」

「却下！！」

希の案には二人して反対する。

どうやら二人とも去年のでこりごりのようだった。

その数日後

夏休みだが今日は登校日、それを終え帰路につく巧たちは皆何か考
えながら歩いていった。

考えてることは皆同じ。

『夏祭り』に何をするかだった。

一週間もあるから、そう言ってるうちに刻々と期限が迫ってきた。
しかし良い案なんて一つも出てない。

大吾郎や家康にも聞いてみたがボディビル大会やオタク検定など
ボツ案ばかり、結局自分たちで考えるしかないというわけで焦って
いた。「あゝもう！面倒くさいわね。何で私たちがこんなことしな
くちゃいけないのよ」

千世の頭はオーバーヒート寸前だ。

「仕方ないでしょ。いつもお世話になってる団長さんの頼みなんだ
から。そんなこと言ってる暇あったら案を考えなさいよ！いつも変
なことはかり思いつくくせにこういうのはダメなのね」

「なゝにゝおゝ…芹沢！今のは聞きづてならないわね」

しょうもないことでケンカを始める二人。

二人ともかなりストレスを溜め込んでるようだ。

「ケンカしたって何も変わらないぞ」

俺の一言でとりあえずその場は収まったが二人ともムスツとしてい
る。

こんな時に乙女姉さんがいれば。

そんなことを思っていると『ストレイキャッツ』に着いてしまった。

「ただいま」

誰もいないのはわかってる。

でも一応言ってみる、すると、

「おかえりー。みんな」

厨房から元気良く出てくる乙女の姿を見て皆驚く。

「乙女姉さん！帰ってきたんだね！？」

「植樹中に大地震が起きてね。そっちの方の援助もしてたら帰って

くるの遅くなっちゃった…ごめんねみんな」

真剣さゼロの謝罪だがそんなこと巧たちには関係ない。

乙女が戻ってきた…それだけで十分すぎることだ。

「でも何で急に？まだあつちは完全に復旧してないんじゃないやあ…」

「うん。そうなんだけど、ほら、こっちはそろそろ夏祭りの時期でしょ。だから手伝いが必要かなあって思ってた」

こういう行事には必ず参加するのも乙女姉さんの特性だ。

「そのことで乙女姉さんに話があるんだけど…」

巧は団長さんに頼まれたことを話した。

「ふむふむ…わかった。この私に任せなさい！」
話して数秒。

乙女は自分の胸をドンッと叩く。

「えっ、もう思いついたの！？何何？」

「それは後程のお楽しみつてことで、じゃあ私は団長さんに話を付けてくるね」

そう言つて乙女は店を出て行った。その二日後、鈴音町全域にあるチラシが配られた。

そのチラシには『第1回鈴音町お菓子作り王座決定戦』と書いてある。

当然ストレイキャッツにもこのチラシは届いていた。

「これが乙女の案…」

「えへへ…良い案でしょ？これなら私達も参加してお店の宣伝もできるし」

そう言つてピースサインをする。

確かに良い案だ。

ちやっかり店の宣伝のことまで考えた乙女の案にみんなも『流石だ』と言つような表情だ。

二年連続で町の祭りを自分たちの店の宣伝に使うのは多少心が痛むが…。

「お菓子ならなんでも良いから希ちゃん頑張つて」

「えっ、乙女姉さんは出ないの？」

「私は審査員長だから」

よく見るとチラシ『審査員長：都築乙女』と書いてある。

「大丈夫。希ちゃんがいるんだから」

まあ希なら心配ないか。

正直乙女姉さんが出場してもあんまり期待はできなかっただろうし。

「……にやあ。頑張る」

希は力強く頷いた。

祭り二日前

その日のストレイキャッツの営業は終了し、文乃たちは帰っていつてしまったため店内はしゅんとしている。

「ニャ〜」

数匹の猫達が何かを欲して俺の足下に集まってきた。

「ん、餌か？」

時計を見ると普段猫達に餌をあげている時間だった。

「ちよつと待つてろよ」

俺は猫達をなだめ、エサを準備しに行く。

廊下には大量のキャットフードが積み上げられている。

以前夏帆さんからもらったものだ。

うちには15匹以上の猫がいる上にもらってから3ヶ月は経ったのだが未だに半分も減ってない、いったいどのくらいの量をくれたのだろうか。

「巧、ちよつと来て」

餌の準備をしてると希がひょいっと顔を出してきた。

「どうした？」

希に連れられて厨房に行く。

するとそこには一つのケーキがあった。「二日後のお菓子作り王座のための試作品」

そのケーキはシンプルなショートケーキだった。

「食べてみて」

そう言ってケーキを切り、俺に差し出す。

そのケーキを俺は一口食べた。

「おいしいよ。でも何でショートケーキに？」

「ケーキと言ったら一番に思いつくのはショートケーキだと思ったから」

俺も希の考えに賛成だ。

やっぱりケーキと言ったら王道はショートケーキだ。

「味は申し分ないよ。あとは飾り付けを工夫すれば良いと思うよ」

「にゃあ。とっておきのを考える」

「ニャー!!!」

突然猫の鳴き声が聞こえたかと思うと後ろから猫が背中に飛びかかってきた。

餌を待ちきれなかったのだろう。

しかしあまりに突然のことだった俺はバランスを崩し、希を巻き込んで倒れ込んでしまった。

「痛っ…希！大丈夫か？」

不可抗力とはいえ希を押し倒してしまった俺は慌ててどける。

「にゃあ。大丈夫」

何事もなかったように希も立ち上がる。

「そう？…ごめんな」

「心配しないで。逆に少し嬉しかった…」

希はそう言って顔を赤くする。

ちなみに俺もそれを聞いて顔を赤くする。

「何かスゴい音がしたけど大丈夫？」

騒ぎを聞きつけて乙女が厨房にやってくる。

「大丈夫。コイツのせいで倒れただけ……」

俺は飛びついてきた猫を掴み乙女姉さんに見せる。

乙女姉さんは一瞬安堵の表情を見せたが希を見て表情が一変した。

「希ちゃん、ちょっと手を見せて」

そう言って希の右手を触る。

「っ……」

すると希の表情が歪む。

「これ…骨折してるわ…」

「えっ…」

乙女姉さんの一言にただ驚くことしかできない俺だった。「これで大丈夫」

乙女姉さんによって希の手に包帯が巻かれた。

「にゃあ、ありがとう」

乙女に頭を下げる希。

「こんなこと朝飯前だから大丈夫よ。でも…その手じゃケーキ作りは無理そうね」

希の右手は包帯でぐるぐる巻きにされている。

使えるのは左手だけ…片手だけでケーキなんか作れるわけがない。

「私…やる」

「気持ちわかるけど今回はどうしようもないわね」

乙女の言葉にも希は諦めない。

「いや！やる」

さすがの乙女もこれには困ってしまった。

「じゃあさ…」

今までずっと黙っていた俺は口を開いた。「俺が希の右手になるよ」二人とも俺の言ってることの意味がわからずきよんとしている。

「希が片手ではできない作業は代わりに俺がする…これで希はケーキが作れるだろ？」

「それいいね さっすが巧」

そう言っただけ俺を抱きしめようとする乙女姉さん、だがそれを俺はかわした。

「でも巧に迷惑かかる…」

「元はと言えば俺に責任があるわけだし。それに前から言ってるだろ。家族には…」

「迷惑かけても良い」

俺が言いたかった言葉をニコニコしながら言う乙女姉さん。
そしてそれに希も微笑む。

「そうだった。じゃあ迷惑かける…よろしく、巧」

「おう！任せろ」

俺は希に親指を立てて言った。

なんやかんやで夏祭り当日。

俺と希は控え室で出番を待っていた。

他の参加者がいる中、俺は一人落ち着かない様子で座っていた。

「巧、大丈夫？」

「う、うん…大丈夫だよ。ちょ、ちょっと緊張しちゃってさ」

笑顔を見せようとするが表情が引きつっているのが自分でもわかる。

「希は平気なのか？」

「にやあ。平気。巧がいるから」

「？……どうしてそう思えるんだ？俺は希や乙女姉さんよりケーキを作るのは上手くないし自分でも美味しいと思えたケーキを作れた試しはほとんどない…なのに何故？」

「私にもわからない。でも巧とならきつと美味しいケーキが作れる

…そう思ったから」

根拠は全くのゼロ。

でも希の言葉に何故か俺も納得できた。

俺も希となら上手くケーキが作れる気がする。

そう思うと俺も何故か自然と落ち着いてきた。

「巧、希！応援に来てあげたわよ」

するとそこへ『迷い猫同好会』のメンバーがやってきた。

「みんな！どうしてここに？」

「どうして？…さっき応援に来たって言ったでしょうが！」

「どうせ巧つちのことだからガチガチに緊張してるんじゃないかと思っでさ」

「アハハ…ありがとう…」

ほんの数分前までそんな状態だったわけだから苦笑いしかできない。

「それにしても満足にケーキも作れないのにパティシエールの希を怪我させるなんて…本当に巧はバカよね」

「文乃…もしかして心配してくれてる？」

「か、勘違いしないで。私はただ怪我をした希だけを心配してるだけなんだから！」

全力で否定するがこれが文乃にとっては全力の肯定だとみんな理解する。

「参加者の皆さん。そろそろ準備して下さい」

そこへ係員がやってきた。「じゃあ行ってくるよ」

「頑張れ巧っち！奇跡が起きることをこのハニワに祈っとくよ」

（……ちよい待て委員長。『奇跡』ってどういう意味だ？）

「お前の運の強さを期待してるぞ」

「巧、己の力を信じる。そうすれば實力以上のことができるはずだ」

（あれ……家康、大吾郎、お前らも……）

「巧！希の足を引っ張ることだけはしちゃだめよ」

「希、私達会場にいるから合図してくればすぐに駆けつけるから何かあったらいつでも合図しなさい」

（千世、文乃までそんなこと言うの…）

（え〜と…みんなは俺達を応援しに来てくれたんだよね…けどみんなが来る前より不安になってる気がするんだけど気のせい……だよね……？）

そんなことを考えながら俺と希は控え室をあとにした。

「それでは『第一回鈴音町お菓子作り王座決定戦』を始めたいと思います。まずは参加者の紹介をさせて頂きます」

そう言うとき会場が暗くなり、入り口だけにスポットライトが当たる。そしてBGMが流れ始めた。

「エントリーNo.1。オーナー、店員は美人ばかり。誰もいないのに営業していたり、十数匹の猫が暮らしていたりと、鈴音町七不思議の一つになっている洋菓子店『ストレイキャッツ』から都築巧さんと霧谷希さん！」

拍手が鳴り響く中入場する俺と希。

（ていうか、そんな七不思議初めて聞いたぞ。誰だ！人の店を心霊スポットみたいと言った奴は！？）

「エントリーNo.2。専業主婦歴40年。掃除、洗濯、料理など家事はなんでもこなす鈴音町婦人会代表の小林ひろみさん」

小林さんが入場すると間髪を入れずに司会者はどんどん進行していく。

「エントリーNo.3。最近テレビや雑誌で引っぱりだこ。鈴音町で料理教室も開いている今回の優勝候補：伊藤恭子さん」

会場には今日一番の拍手が鳴り響く。

どうやら相当人気があるようだ。

「ルールは簡単。制限時間内により美味しいお菓子を作った人の勝ちです。それでは早速始めたいと思います。調理スタート！」

司会者の号令とともに開始の号砲が鳴った。まずはスポンジ作りからだ。

片手しか使えない希にはこの作業はできない…だからこれは俺の役目だ。

俺は小麦粉を加え混ぜる作業をする。

「そろそろいいかな」

「ダメ。まだ混ぜ方が足りない」

次の作業に移ろうとした俺を横で見ていた希が止めた。

「もう十分じゃないのか？」

「それだとふくらみが悪くてばそばそしたスポンジになる」

希にそこまで言われると逆らえない。

俺は今日は希の右手なんだしな。

言われた通りに混ぜる作業をする。

「にゃあ。もういい…次の作業」

その後も希の指示や指摘を受けながらケーキを作っていた。

「さて…それでは審査に入りたいと思います」

それぞれお菓子を作り終え、後は試食してもらい結果を待つだけだ。

「それではまずは伊藤さんのお菓子から審査していただきますよう」
伊藤さんもケーキを作っていた。

ガトーショコラだ。

「お菓子なんで当然甘いんですけど甘過ぎずちょっぴり大人の感じのガトーショコラにしてみました。かなり上手にできたと思います」
さすがはプロだ。

コメントは自信に溢れてるし外見もしっかりとまとめられてる。
審査員の三人は三つに切られ配られたケーキを口にした。

「これ美味しいー！」

乙女姉さんは笑顔でコメントをする。

「しつとりとしていてとっても美味しいですよ」

二人から高評価を受け伊藤さんの表情に余裕が見える。
しかし、

「こういうケーキは苦手なんですよね」

と、ここで一人の審査員から苦言が出た。

良かった。

プロだから手ごわいだろうけどまだ勝ち目もあるみたいだ。

「それでは次は小林さんのお菓子です」

小林さんのお菓子はみたらし団子だった。

「このお菓子は皆さんも一度は食べたことがあると思います。派手さはありませんが和菓子の良さを楽しめると思います」

簡単なコメントのあと、審査員の試食に入る。

「これも美味しい！うちの店を出しちゃおうかな」

（乙女姉さん…：うちは洋菓子専門店だから和菓子は無理じゃないかな。それにコメントがさつきとほとんど変わってないし…）

「私はこういったお菓子が好きなんですよ」

先程苦言を言った審査員は、満面の笑みだ。

もう一人の審査員も軽く誉めた程度のコメントをした。

そしていよいよ俺たちのケーキが審査される番になった。「最後は巧さんと希さんのお菓子です」

審査員の下に置かれたケーキ。

「自分たちはケーキの中でも王道のショートケーキにしました」
デコレーションは全て希が考え、ほとんどの作業は希がやった。

外見は完璧…あとは味だ。

「このショートケーキは良いですね。スポンジもしつとりとしてますし…、とても高校生が作ったようには思えません」

「このケーキなら私も好きになりそうです」

「すごい！巧…よく頑張ったね」

全ての審査員からのコメントを聞き、気持ちが高ぶる。

もしかすると優勝できるかも。

そんな期待を寄せて審査は終了した。

約10分後

審査員三人による協議が行われ、いよいよ結果発表となった。

「さて…それではついに鈴音町お菓子作り対決の決着がつきます。

優勝は伊藤さんのガトーショコラか小林さんのみたらし団子か巧さんと希さんのショートケーキか…審査員長、都築乙女さん、結果をどうぞ」

すると乙女姉さんが一步前にでる。

俺は緊張から唾を飲み込んだ。

「優勝は…小林さんのみたらし団子です！」

その発表の瞬間、小林さんは大喜びする。

そして負けた俺はショックからか全身の力が抜けた感じがした。

その後のコメントや司会者の話はまったく頭に入ってこなかった。

誰もいないストレイキャッツの厨房、そこに俺は一人でいた。

希のデコレーションは完璧だった。

（他のどのお菓子よりもインパクトはあったはずだ。それなのに何故負けたのか、やっぱり俺が作ったからダメだったんだ。でも希が全部作っていたら優勝できたんじゃないか？）

そう思うと希に顔向けできなかった。

文乃たちも心配して慰めの言葉をかけてくれたがみんなが応援して

くれていた分余計に申し訳ない気持ちになった。
今もその気持ちを振り切ることができず、厨房で一人落ち込んでい
る。

「巧……」

声に気づき入り口を見るとそこには希が立っていた。「希……」

今の俺には希にかけられる言葉がなかった。

「巧、このケーキ食べてみて」

「これって……」

希が差し出したケーキ……それはお菓子作り対決で俺と希が作ったケ
ーキだった。

「にゃあ……早く」

「あ、ああ……」

俺は希に急かされながら一口食べた。

「美味しい？」

俺は小さく頷いた。

作ったケーキは普段の希のケーキとほとんど変わらない出来だった。
自分の普段のケーキの味からしたら雲泥の差だった。

「たぶん私一人で作っても優勝はできなかった」

希の言葉に俺はハツとした。

希は気づいていた。

俺が負けた責任を感じて落ち込んでいることを。

「私は最高のケーキができたと思う。だから巧が落ち込む必要はな
い」

希の言葉は少しずつ俺の気持ちを楽にしてくれた。

「私は嬉しかった。巧が私の我が儘を叶えてくれたから。……巧、
ありがとう」

希は微笑みながら言った。

それを見ると今まで落ち込んでいた自分がバカバカしく思えてきた。

「こっちこそありがとな、希」

俺も希に礼を言った。

そしてまたこんな機会があれば次は希と二人で優勝して喜びを分かち合おう…そう心に決めた。

それから1ヶ月後

希の怪我は完治しメインパティシエールとして復帰している。

因みに乙女姉さんは希が復帰した次の日にまたどこかへ行ってしまった。

「希、このケーキ食べてみてよ」

そう言っただけで出したのは俺が作ったケーキだ。

あの出来事以来自分のケーキの腕を上げるためにこうして毎日ケーキを作っただけで希に試食してもらっている。

「じゃあ…スポンジがかたい」

希からの不合格のコメント。

正直俺はまだ希から合格をもらったことが一度もない。

「またか…俺にはやっぱり才能ないのかな…」

ここまでダメだと自分の才能を疑いたくなる。

「大丈夫…巧ならできる」

そんな俺を希は頭を撫でながら励ましてくれる。

「ありがと…希」

「巧！もう開店時間なのになんで準備中の札が出てるのよ!？」

「もうそんな時間か!？ヤバい…希!」

「じゃあ…急ぐ」

文乃が来たことにより慌ただしい一日が始まる。

この夏休み、俺はケーキを上手く作れるようになるという目標ができたのだった。

夏休み（後書き）

どうでしたか？また、次回をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2358m/>

無口猫の恋

2011年4月1日22時45分発行